第16章　「これからの小学校教育のあり方」に関する自由記述の分析と検討
―教師たちは、「働き方改革」に託して、「内的事項」の再構築に期待する―

加藤幸次
（上智大学名誉教授）

はじめに：分析・検討の手続き

自由記述とは、決められたあるテーマについて、自分の意見をまさに「自由に」書くことである。一般的に、あまり字数制限はもうけられていない。本調査のテーマは「これからの小学校教育のあり方」で、枠組みを示したが、字数制限をもうけず、教師たちに自由に意見を書いていただいている。本調査に協力していただいた763人の教師のうち、410人の教師（53.7％）が自由記述に応じてくれている。自由記述の数は535である。しかし、１つの記述の中に２つの意見が記載されているケースが55、３つの意見が記載されているケースが９、４つの意見が記載されているケースが４あり、それらの意見を１つの記述とみなすと、総計で535の自由記述となる。さらに、１つの自由記述の中に分析の基礎単位として使う「キーワード」が535の自由記述の中に複数混在するケースが64あり、キーワード別での自由記述の数は599になる。

自由記述を分析し検討するために、一般的には、「アフターコーディング」とか、「テキストマイニング」と言われる分析手法が用いられると言われているが、ここでは『キーワードのクラスター化』という処遇を考える。まず、自由記述の全体に目を通し、頻回に出てくる「キーワード（単語）」を選び出す。キーワードの出現頻度の多い記述について、具体的な記述内容を理解する。次に、関連すると考えられる複数のキーワードを識別し、頻度の最も多いキーワードを核として、「クラスター化」を図る。さらに、「クラスター化」したまとまりに適切な「テーマ」をつける。最後に、「テーマ」ごとに内容について検討し、総括する。

他方、適切な「テーマ」をつけるにあたって、次のような４つの「枠組み」を想定する。まず１つは、学校教育をめぐる“外的事項”という事柄にかかわる枠組みである。外的事項とは学校教育を成り立たせている「諸条件の整備確立」という概念である。次の１つは、“外的事項”と対をなす項目であるが、学校教育をめぐる“内的事項”という事柄にかかわる枠組みである。内的事項とは学校や教師に任されていると考えられている「教育課程（教育内容や方法）」である。さらに１つは、教育にかかわる外的事項の延長上に位置すると考えられる“教育制度”にかかわる枠組みであり、最後の１つは、教育にかかわる内的事項の延長上に位置すると考えられる学校教育の“目的・目標”にかかわるものである。

なお、さらにもう一段深い自由記述の分析・検討を目指して、「男女別、年齢別、役職別、地域別、規模別」等の分析が試みられるべきことは言うまでもないが、ここの小論では割愛することとする。

次に、記述の順序であるが、キーワードの頻度数順とする。第１に教育の“外的事項”、第２に教育の“内的事項”、そして、第３に“教育制度”、第４に学校教育の“使命・理念”という順序で分析し、検討することする。

〈テーマ、クラスターおよびキーワード（頻度数：%）〉

Ⅰ　教育の「外的事項」をめぐって（頻度数、222：その割合、37.1%）

1　労働条件・職場環境（118：19.7%）

（1）働き方改革（45：38.1%）、（2）多忙さ・ゆとりの無さ（時間的・精神的）（34：28.8%）、（3）業務（改善）（32：27.1%）、増員（7：5.9%）

2　保護者・地域（社会）（104：17.4%）

（1）保護者（61：58.7%）、（2）地域（社会）（40：38.5%）、コミュニティ（スクール）（3：2.9%）

Ⅱ　教育の「内的事項」をめぐって（141：23.5%）

1　教育内容（61：10.2%）

（1）外国語（英語）（28：45.9%）、（2）精選（13：21.3%）、教育課程（10：16.4%）、プログラミング学習（6：9.8%）、総合的学習（4：6.6%）

2　教育方法（80：13.4%）

（1）個別指導･少人数指導（62：77.5%）、（2）多様性･ゆとりの無さ（指導内容過多）（15：18.8%）、協働的な学び（2：2.5%）、個別最適な学び（1：1.3%）

Ⅲ　学校制度をめぐって（138：23.4%）

1　制度改革（76：12.7%）

（1）少人数学級（学級規模）（53：69.7%）、（2）教科担任・専科教員（22：28.9%）、小中一貫（1：1.3%）

2　教材研究・研修（35：6.1%）

（1）教材研究（20：57.1%）、（2）研修（12：34.3%）、バラバラ（2：5.7%）、チーム（1：2.8%）

3　ICT・GIGAスクール（27：4.5%）

（1）ICT（21：77.8%）、（2）GIGA（スクール）（4：14.8%）、デジタル（2：7.4%）

Ⅳ　学校の使命・理念をめぐって（98：16.4%）

1　心の教育・道徳教育（46：46.9%）
2　体験（20：20.4%）
3　自己肯定（有用）感（13：13.3%）
4　集団（性）の育成（10：10.2%）
5　基礎基本（9：9.2%）

〈注〉

1　ここでの小文字で表記した%はクラスター内での割合を示す。
2　以下の記述（分析・検討）にあたって、クラスターを構成するキーワード（下線）が10%未満のものは、記述量に制限があるため割愛する。

Ⅰ　教育の「外的事項」をめぐって（222：37.1％）

1　労働条件・職場環境（118：19.7％）

「多忙さ」について聞いたQ17によれば、「とても忙しい」と答えた教師は52.4％で、「かなり忙しい」と答えた教師は42.6％で、両者を合わせると、なんと95％になる。他方、ここでの自由記述では、「これからの小学校教育のあり方」を尋ねているのであるが、記述してくれた教師たちは「多忙さ・ゆとりの無さ」という職場環境の現状と、「業務（改善）」と教職員の「増員」を通して「働き方改革」の推進に大きな関心を寄せている。

（1）働き方改革（45：38.1％）

【このクラスターでは、働き方改革を求める意見が最も多い。その理由は、1）質の高い教育を進めるため、2）教師のライフ・ワーク・バランスを図るため、3）授業（指導）に専念するため、と言う。しかし、4）職務内容（業務量）が増加するばかりで減少することはなく、5）働き方改革を達成することはむつかしいと言う。】（以下、3～4の代表的な自由記述を記す）

・求められていることが増え、その中での働き方改革は非常に難しく感じる。時間を削るために職務の内容の質は落とすことはできない。子供たちの指導にあたる時間（子供たちのためになる時間）を確保できる勤務形態がもっと柔軟になればと思う。(30-39歳、男)（以下、年齢区分、性別）

・色々な取り組みが追加されるのに、削減される取り組みがないので、働き方改革などと言われているのに、多忙感が増す一方です。授業に専念できる環境ができることを願います。(40-49歳、女)

・質の高い教育を進めるために、働き方改革を力強く進める必要があると感じている。具体的には①教員の業務量を減らす。②人員を増やす。の2点が必須であると考える。(40-49歳、男)

（2）多忙さ・ゆとりの無さ（時間的・精神的）（34：28.8％）

【多忙さ・ゆとりの無さに追われている教師の姿が浮かび上がってくる。保護者や児童が多様化する中、対応に追われる一方、（1）で見てきたごとく、学校に期待される業務（カリキュラム）は増加し、減少することはないと言う。時間的、精神的な「ゆとりの無さ」は、「多忙さ」と表裏一体と考えられる。ゆとりの無さを解消するために、次の（3）業務（改善）や増員が必要であると言う。】

・子供たちが前向きで夢を持った日々を送れるようにしたいと思う。教師が多忙で、児童と関わる時間が取れていないが現実。改善していけるようにしたいが、あまりにカリキュラムが多岐にわたってきた昨今においては、難しいと思う。(50-60歳、女)

・多忙化の解消。業務量の削減に取り組まなければ、成り手がいなくなってしまうという危機感を抱いています。(30-39歳、男)

・学習内容が増え、児童も教師も多忙な生活となっている。もう少しゆとりあるカリキュラムとなっていくことが望ましい。(30-39歳、男)

（3）業務（改善）（32：27.1％）

【働き方改革のために、学校現場では「業務（職務）」の改善がなされつつある、という。しかし、業務改善の必要性は認識されつつも、具体的な取り組みは明確ではない。どんな業務をどう整理するか、「スクラップ・ビルド」ができず、校務分掌の見直しがなされていないと言う。そ

の難しさが浮き彫りになる。】

・残業が多いです。定時退勤など働き方改革が叫ばれていますが、日常の業務が減っていないのに早く帰り、家で仕事したり、場合によっては土日出勤をしている人もいる（今の職場だけではない）。(30-39歳、男)

・仕事内容がかなり広範囲になってきているので、授業研究に使う時間が短くなっています。業務改善のためにも、人を増やし（教員等）、ゆとりをもって子どもと向き合えるようになっていけばと思っています。(30-39歳、男)

・業務分担の明確化、校務と担任の切り離し。学年一人の副担任制の導入等。教師の授業力、児童理解力の向上のための校内研修（教育技術の引継ぎ）。(40-49歳、女)

・質の高い教育を進めるために、働き方改革を力強く進める必要があると感じている。具体的には①教員の業務量を減らす。②人員を増やす。の２点が必須であると考える。(40-49歳、男)

２　保護者・地域（社会）（104：17.4％）

「学力差の解消」について尋ねたＱ12によれば、「保護者に関心と支援をお願いする」という項目に対して「とてもそう」と答えている教師は43.1％で、「ややそう」と答えている教師は51.4％で、両者を合わせると、なんと94.5％になる。また、「学校外の地域の人を活用する」という項目に対して「とてもそう」と答えている教師は19.5％で、「ややそう」と答えている教師は54.4％で、両者を合わせると、なんと73.9％になる。すなわち、教師は保護者や地域の人の理解と支援を大いに期待していると言える。

他方、「教育改革への賛否」について尋ねたＱ15によれば、「社会や保護者などの要望を取り入れて、教育課程を編成すること」という項目に対して「とても賛成」と答えている教師は9.6％で、「やや賛成」と答えている教師は37.7％で、両者を合わせても、47.3％に過ぎない。Ｑ12とＱ15を合わせて考えると、「学力差の解消」には保護者や地域社会からの支援を期待しながらも、必ずしも学校は「保護者や社会の要望」を受け入れることに積極的とは言えない。

（１）保護者（61：58.7％）

【保護者というキーワードは最も頻度が高い言葉である。教師は日々、子どもたちの指導に当たっているが、多様な価値観をもつ保護者を常に意識して指導に当たっている、と言う。学校は保護者と地域（社会）と連携して子どもの教育に当たるべきであるが、身勝手な要求をして来る保護者に困惑している、とも言う。】

・学校だけで行うことには限界がある。保護者、地域との連携が必要である。(50-60歳、女)

・子供の学習習慣がつくような環境を、教師だけではなく地域、保護者も一緒に作っていけるようにしてもらいたい。教師が全てを背負うのではなく、保護者、地域対応、生活、そうじなど、様々な指導を分担して行えるようなシステム（教科指導だけでも精いっぱい。学習指導に集中させてほしい）。(40-49歳、女)

・多様な価値観の児童や保護者が増えてきているので、それに幅広く対応していく必要がある。(30-39歳、男)

・教師が授業に集中できる学校が理想です。今は子育て全てが学校に任されています。地域の力、保護者の力、その他の力を活用すべきだと思います。(50-60歳、女)

（２）地域（社会）（40：38.5％）

【保護者と地域（社会）はしっかり区別されているわけではないが、区別されている記述もある。たとえば、それぞれの地域には、地域の「課題、特性」があり、課題や特性に配慮した教育がなされるべきであるとか、「地域人材の活用」がさらになされるべきであるといった記述である。】

・公立学校は地域の特性に沿って、教育内容を柔軟に調整することはよいが、ある分野に特化して高度な内容を学習するのはよくないと考えている。（50-60歳、男）

・小学校は特に「地域の学校」として、それぞれの学校の特色が出しやすく、教育課程の工夫をすることで、地域の教育コンテンツを充分に活用しながら、大きな教育効果を生むことができる。（50-60歳、男）

・子どもたちに行き届いた教育活動を行うためにも、地域人材の活用、人員の増員（教科担任制、フリーの教員の充実）などが積極的に行われ、組織やシステムの強化につながればいいと思う。（40-49歳、男）

Ⅱ　教育の「内的事項」をめぐって（141：23.5％）

１　教育内容（61：10.2％）

自由記述に答えている教師の多くは教えなくてはならない教育内容が増加してきている、と言う。「教えねばならないことや、やらなければならないこと、配慮すべきことが増えていくばかり」や「やるべきことが増えすぎている」と感じている教師が多い。英語活動、英語の導入、道徳の教科化、プログラミング学習がその代表的な例である。なお、カリキュラム・マネジメントにつながると考えられる「精選」を主張する自由記述は２行くらいの短い記述であるが、13のうち10と多くある。「教育課程」に関する自由記述であるが、地域カリキュラム（２）、校種間の連続性（２）や教科等横断的なアプローチ（１）が散見されるにすぎない。

（１）外国語（英語）（28：45.9％）

【英語教育の重要性について聞いたＱ７-Aによれば、「とてもそう」と「ややそう」を合わせると94.2％である。しかし、Ｑ７-Eによれば、外国人教師に教えてもらいたい（「とてもそう」と「ややそう」を合わせると84.4％）と言う。自由記述では、英語嫌いが増加してきているし、学習意欲が低下してきている、と言う。】（以下、３～５の代表的な自由記述を記す）

・外国語、プログラミング、キャリア教育など、これからの社会に必要なことは理解できるが、教育現場がしていかなくてはならないことが増えてきている。学校以外の場にできることを移していく必要があると思う。（40-49歳、女）

・小学校高学年の英語は、中学の内容と変わらないことを詰め込んでいるので、高学年になってから英語が好きではなくなっている子が増えてしまっているのが残念である。（50-60歳、女）

・英語の教科化により、英語嫌いな子が目立ってきた。中学校での学習内容が前倒しされ、小学校に降りてきた印象を受ける。３、４年の英語活動で興味を持っても、高学年の英語科により、意欲は下がってしまう。また、小中で授業改善しても、高３では受験対策の英語となる。高校入試、大学入試が変わらなければ受験英語からの脱却はできない。（50-60歳、男）

（２）精選（13：21.3％）

【多忙さ・ゆとりの無さの原因が教育内容の過多にあるというなら、当然、教育内容の「精選」

が関心事となるべきであるが、必ずしもそうではない。精選することの必要性は強調されているものの、どのように精選すべきかについて、１つを除いて記述がない。結局のところ、教科とその縦割り体制が厳然と存在し、「教科横断的学習」はほとんど進んでいないのではないか、と思われる。】

・「子供たちに一番必要なこと」を精選し、不必要なものは減らし、必要なことをどんどん導入していくべきである。(30-39歳、男)
・保護者や地域の要望、社会の期待にすべてこたえながら進めていくのは難しく、年々限界を感じながら、日々努力を積み重ねています。どんどん増やすのではなく、精選していくことが必要であると感じます。(50-60歳、女)
・行事の精選（運動会→体育参観)。・研修の簡略化、出張を減らす。子供に向き合う時間とする。(40-49歳、女)
・コンピューターリテラシー、道徳、ソーシャルスキル、ディベートなどこれからの社会生活において必要となるものの洗い出しをし、その中で分化的な取り扱いで教科、体験、問題解決等を含んでいくような教育課程へと移行していく必要がある。(50-60歳、男)
・教育課程を見直し、削れるところは削る。教え込む内容を減らし、丁寧に取り組ませることで、下位層を作らないようにする。それが働き方改革につながる。(29歳以下、男)

２　教育方法（80：13.4％）

１で見た教育内容に対する自由記述は61に対して、教育方法に対する記述は80と多い。中でも、個別指導・少人数指導への関心が62と高い。ただし、答申「令和の日本型学校教育」で強調されている「個別最適な学び」という表現は１回しか使われていない。同じように、「協働的な学び」という表現も２回しか現れていない。また、「アクティブ・ラーニング」に関するQ15-Bでは、82.5％の教師が「とても賛成」あるいは「やや賛成」と答えているが、自由記述では１回も現れていない。教師たちはこうした言葉というよりは個別指導・少人数指導という言葉を使っている、と言える。

（１）個別指導・少人数指導（62：77.5％）

【「一人」というキーワードは599の自由記述の中で53回見られる。そのうち「個別指導・少人数指導」にかかわる表現は35回である。他方、「個」というキーワードは42回見られるが、そのうち37回は「個に応じた指導（支援)」という表現である。ここでは、「個に応じた指導（支援)」は「個別指導・少人数指導」という言葉に中に入れた。１つは、「児童一人一人に向き合う時間」という記述に代表されるように、個別指導（個に応じた指導）を目指すという文脈の中で見られる記述である。他の１つは、「一人一人の主体性や生きる力の育成」という文脈の中で見られる記述である。】

・今までと変わらず子供一人一人をじっくり観察し、本当に困っている時に解決の糸口を提示するなど、困難に立ち向かう力をはぐくんでいきたい。又ICTを効果的に活用した授業を積極的に活用していきたい。(50-60歳、女)
・情報リテラシーなど学校で教える必要があるものが増えている。子供一人一人に目を向けるために一学級の人数を少なくしてほしいと感じることもある。教員の時間外勤務に対しての対応を見合ったものにしてほしい。(29歳以下、男)
・１クラスの人数を減らすなど、子供たち一人一人をしっかり見守ることのできる環境を整え

ていくことが大切ではないかと思います。(29歳以下、女)

・教職員の数が絶対的に足りない。子供が多様性になってきている分、個に応じた指導をするためには少人数指導ができる環境が必要である。(年齢不明、性別不明)

・多様性に応じていかねばならない。違いを受け入れ、また日本人としての誇りを持つ子の育成が進んで欲しい。(50-60歳、女)

(2) 多様性・ゆとりの無さ (指導内容過多) (15：18.8%)

【Ⅰ-1-(2)で“時間的･精神的”な「ゆとりの無さ」について取り扱ったが、ここでは“指導内容の過多”に伴って生じてきている「ゆとりの無さ」を意味している。Ⅲ-2-(1)に見る「教材研究」の時間が取れず、児童も教師も多忙な生活となっている、と言う。多様性が尊重され、個(特性)を大切にすることの重要性はよく認識されている。したがって、「個に応じた対応、指導」の重要さを否定する自由記述はない。しかし、そのためには教員増が必要であるという自由記述が極めて多い。「個」とともに「協働」の重要性を指摘する記述があり、また、同じ教育課程を全員に適用することの不自然さに気付いている記述もある。】

・多様性、個性の尊重と共に、協調性などもとても大切だと思う。昔の子供たちよりも思考の柔軟性がないように感じる。他と違うことを嫌がる子が増えている。個性を尊重しているのと、相反しているように感じる。もっと寛容な子たちを育てていく必要があると感じる。(50-60歳、女)

・個を大切にした教育が行われる一方で、共に関わり合って生きていくことへの対応力も必要となっていくのではないかと思っています。関わりの教育を一番行うことができるのは、小学校時代ではないかと考えます。(61歳以上、女)

・担任している学級に個別支援が必要な児童が多い。今後ますます多様な子が増えてくると考えられるため、個に応じた指導、支援のあり方をもっと考えたい。(30-39歳、女)

・教科分担制など、分業を徹底することにより、教員を働きやすくして、教材研究の時間を充分確保し、子供たちに質の高い教育を提供できるようにする。・行事の見直しを図り、児童にも教員にも過度な負担がかからないよう配慮する。個人的には行事はなくてもいい。(40-49歳、女)

Ⅲ　学校制度をめぐって (138：23.4%)

1　制度改革 (76：12.7%)

このところ、理科や英語を指導する教科担任/専科教員が導入され始め、特に、高学年教師の担当授業時数の縮小も期待され、関心を呼んでいる。多くの記述は、指導内容の専門性にかんがみて教科担任制に賛成であるが、しかし小学校は学級担任制であるべきだ、という記述もある。

クラスサイズの問題も視野に入ってきており、特に「30人学級」の導入に関する自由記述が注目される。教師の負担の軽減と同時に、個(一人ひとり)に応じた指導の実現のために少人数学級が求められている。「20人学級」についての記述も見られる。

それに対して、小中一貫校(義務教育学校)についての記述は1件であり、学校段階の統合については関心がないと言える。

(1) 少人数学級 (学級規模) (53：69.7%)

【多忙さ・ゆとりの無さ、教師の負担の軽減への対策として、25人学級、30人学級が提唱され

ている。】（以下、２～５の代表的な自由記述を記す）

・業務量を減らす。・教職員を増やす。・少人数学級の推進。・子供たちにゆとりをもって関わる。この点に尽きる。（50-60歳、男）

・教師が忙しいので、教師の人員を増やして、25人学級を目指して欲しいです。子供たち自身が多様化している為、一人の教師のみで対応できるには限界がある。（40-49歳、女）

・30人学級を導入することにより、１校の教員の数が増え、分掌の仕事も減り、子供を見る目も増えると思う。ぜひ実施して欲しい。（40-49歳、男）

（２）教科担任・専科教員（22：28.9％）

【「増員」の要求は具体的には教科担任・専科教員を増やしてほしいということである。同時に、学級担任制の良さがなくなるのではないかという危惧もある、と言う。他方、学級２人担任制も考えられており、むしろ、学級規模を縮小すべきであるとも言う。】

・小学校に教科担任制をしくだけにして欲しい。（50-60歳、男）

・教科担任制を定着させる必要があると思います。今までの学級担任制では対応できない問題が増えているため、複数の教員で子供たちを指導できる教科担任制はとても有効だと考えます。（40-49歳、男）

・様々な子供のニーズに対応するためにも、習熟度別学習などが行われるといいと思います。授業づくりをする上で、いつも自分の学習不足を感じることがあるので、教科担任制にすることで、より深く学べ、子供たちにもよりよい学びを提供できるのではないかと思います。（29歳以下、女）

・教科担任制になることで、仕事の負担は減るが、小学校としての魅力がなくなってしまうと考える（自分のクラスを育てたい）。その結果教員の人材もより減る可能性がある。（30-39歳、男）

・人材を確保して、１学級に２人担任制にしていただいたり、専科の教員を増やしていただくなどして、教員がゆとりをもって仕事ができるようにしてほしいです。（50-60歳、女）

２　教材研究・研修（35：6.1％）

教師にとって「教材研究」とは、指導する単元にかかわる教科書などを検討するという「授業準備」と考えられる。その授業準備が多忙さ（教育内容の増加、授業以外の業務の多さ等）の中で行うことが難しくなってきている、と言う。「教材研究」についての自由記述のほぼすべてが、授業準備が困難であることに触れたものであることを考えると、教師は授業への準備を十分せずに授業を行っている、と言え、学校教育の核心が消滅しつつあると言えなくもない。

「研修」の必要性を否定する記述はないが、ここでも多忙さの中で研修ができていないという記述が目立つ。いわゆる「自由研修」の機会がないことに対する不満も聞かれる。

（１）教材研究（20：57.1％）

【指導内容が増加していて、さらに、学力格差が広がってきていて、教材研究は必要であるが、十分できない、と言う。十分な指導ができていない深刻さが浮き彫りになっている。】

・学校が行うべき業務とそうでない業務をしっかり分けて、教材研究や児童一人一人に向き合う時間を作っていくべきだと考えます。・教科書のページ数も年々増え続け、指導内容も大幅に増加してきました。だからこそ、より教材研究をする時間を作りださなければ、どんど

ん学習についていけなくなる子供が増え、学力の格差も広がっていくように感じています。学習内容にゆとりがなく、機械的に子供たちに教えてしまっていることに罪悪感を感じています。もう少しゆとりがあれば学習につまずいてしまう子を救えるのに、もどかしいです。(29歳以下、女)

・教師が教材研究やクラスのことだけを深める毎日であって欲しい。今は雑務が多すぎて、教材研究が後手に回る。本来の仕事を充実させられるような時間を過ごしたい。パソコンの技術などは専門家に任せたい。その技術を使って、教育に生かしていくのはよいことだと思うが。(50-60歳、女)

・英語もタブレットを使った教育もと言われ、現場はアップアップです。朝の７：30～夜７：30まで、まったく休憩もなく働き、教材研究もままならない今の現状を何とかして下さい。教科専門の職員を配置するなど、少しでも現場の負担を減らすことが、充実した小学校教育へとつながると思います。(50-60歳、女)

（２）研修（12：34.3％）

【研修は重要であるが、多忙さ・ゆとりの無さから研修の機会が奪われている、と言う。】

・先の見えない未来に対し、しっかりと基礎、基本をおさえた上で、友達と共同的に討論したり、話し合ったりしながら、発展的な課題に取り組んでいく力がさらに求められると思います。そのためにも教員はしっかりと研修を積めるような環境を整えていく必要があると思います。(30-39歳、男)

・教育委員会に縛られない、もっと自由な研修の選択を。(40-49歳、女)

・授業力を身につけるための研修に回す時間も限られ、早く退勤しても持ち帰った仕事を自宅で遅くまでしている現実がある。(50-60歳、女)

３　ICT・GIGAスクール（27：4.5％）

一人一台のデジタル端末（タブレット）が全国の諸学校に配布されたが、しかし、ICTに関する自由記述は21と高くない。また、GIGAスクールに関する自由記述はさらに少なく４に過ぎない。さらに、すでに導入され現に活用されているデジタル教科書に関する記述は０である。

（１）ICT（21：77.8％）

【「ICT機器に関する知識をもっと多くの先生が身につけ、活用していく力が必要だと感じます」という記述に見られるように、いまだ、ICTへの期待はあるものの、学校、教師は準備段階にあると言えるのではないか。「多様化する社会に対応する力をつけるために、情報処理能力、ICTを使いこなす力、考えを生み出す力など、今までとは違った学力が必要になってくる」、「パソコン、タブレット等デジタル化が進むので、ついていけない」といった記述が現状をよく言い表している。ICTという言葉が使われ始めてかなりの時間が経過しているが、関心は極めて低いと言える。】

・多様な発達や考えの子供が増えてきている中で、すべての子供たちに対応し、指導していかなければならないと感じている。また、ICTの導入により、その分野においても教師が学び、より効果的な活用を目指していく必要がある。(40-49歳、男)

・パソコン、タブレット等デジタル化が進むので、ついていけない。(50-60歳、女)

（2）GIGA（スクール）（4：14.8％）

【GIGAという言葉が使われ始めてかなりの時間が経過しているが、GIGAスクールへの関心は極めて少なく、ほとんど、捉えられていないと言える。】

・支援が必要な子供の増加、保護者対応、GIGAスクール、外国語、文書処理…あげればきりがありませんが、学級経営に加えて、一人の教師はたくさんの仕事を毎日毎日続けています。子供と遊ぶ時間が欲しいです。トイレもがまん（いけない、忙しくて）しながら頑張っています。(40-49歳、女)

・子どもたちを大切にした教育をするために、教員を増やすとともに１クラスの人数を減らしてほしい。・GIGAスクール構想が継続するために補助金が必要。(50-60歳、男)

Ⅳ　学校の使命・理念をめぐって（98：16.4％）

キーワードの出現頻度別から言えば、小学校の使命・理念は、なにより心の教育・道徳教育を行うことであり、体験活動（学習）を重視することである。学力（3R's）と考えられる基礎基本の定着や集団性の育成を図るということよりも、自己肯定（有用）感をもたらすことに、より重点が置かれている、と言える。

１　心の教育・道徳教育（46：46.9％）

【令和の日本型教育の特色は知育、徳育、体育の一体的な育成にあると言う。したがって、心の教育・道徳教育を行うことを学校の使命であるとする考え方は強い。さらに、情操教育、人権教育、キャリア教育を重視している、と言う。】（以下、２～５の代表的な自由記述を記す）

・大きな変動が予想される社会を生き抜くために、将来必要となる力を見極めながら、研修を推進していきたい。その中で心の豊かさや道徳性の視点から、子供たちの育ちを見守り導いていく必要がある。(50-60歳、女)

・人と関わることで、人との関係を築く力を育てる。喜怒哀楽が日々あることで、自分の将来に対する見通しを考えていく態度を育てる。その為にたくましい心と体が大事と考える。(50-60歳、女)

２　体験（20：20.4％）

【20の自由記述があることからもわかるように、教師は子どもたちが手や体を動かして学ぶ学習活動を重視していることがわかる。「バーチャルな体験が増えていくと思われる。幼児期に実際に体験する遊びが小学校の学習の基礎」と捉え、「自己肯定感、自己有用感を味わう体験」「仲間と協働して、問題を解決する体験」が重要になってくる、と言う。】

・基礎学力を身につけさせると同様に、私は仲間をつくることも学力（生きる力）だと考えています。仲間と協働して、問題を解決する体験を増やすことが大切であり、そのような場を設定することが大切であると考える。(29歳以下、男)

・体験的な学習を取り入れ、子供たちが関心を持って学べるようにしたい。得た知識や学習が生活の中で活かすことができる活用力をつけていくことも必要だと思われる。・近年、子供の数は減少しているが、特別支援教育の対象となる児童は増加している。能力のでこぼこが大きく、自己不全感を持ちやすい子たちが、自分の良さを知り、個性となる長所を伸ばせるような教育、また偏見や差別のないインクルーシブ教育が実現することを願う。(50-60歳、女)

・多くの人と関わり合って学び、多くの実体験を通して心を豊かにすることが、大切だと思います。(40-49歳、男)

3　自己肯定（有用）感（13：13.3％）

【子どもたちの自己実現、自信を育てるために、自己肯定感、自己有用感、自尊感情の重要さが強調されている。】

・子供たち一人一人が自身の生き方や未来、将来について現在の自分や自分を取り巻く人々や地域の課題などについて、解決を目指すことを大事にしながら進めていきたい。そして、自己肯定感、自己有用感、自尊感情をはぐくみながら、ひとりひとりの子供が自信を持って自立しながら成長していくことができるようにしたい。(50-60歳、男)
・子供たちの自己実現を支援する場として考えている。自己肯定感、自己有用感を味わう体験を数多くさせたい。(50-60歳、男)

4　集団（性）の育成（10：10.2％）

【同じ暦年齢の子どもたちで構成される今日の学級集団が、当然のこととして受け入れられている。学級での集団生活が大切であると捉えられている。】

・学校の意義を大切にし、集団生活でしか得られない人との関わりを大切にしていきたいです。協働的な学び、達成感を味わわせる。(40-49歳、男)
・低・中学年は、人格形成、基礎学力、集団生活での力を身に付ける。高学年以降は、能力別、教科別学習を進め、個人の能力に合った学習を進めるべきであると考えます。小学校は１～４年、５年から中学校のくくり……など、高学年には、もう少し厳しく現実の個人の能力に応じた教育を施すべきではないでしょうか。公教育における高い教育水準を保ち、より効果的な学力をつける学習をするには、今の学習集団の作り方では限界があるように感じます。(40-49歳、女)

まとめ

まず、４つの「テーマ」を概括してみると、次のことが言える。

（1）「これからの小学校教育のあり方」を尋ねているのであるが、教師たちは「これからのあり方」について使命や理念（将来像や理想像）を考えているというよりも、「いまという現状」の中で改善策を求めていて、その中で「あるべきあり方」を描いていると言える。要約的に言えば、教師たちの意見は、“働き方改革に託して、内的事項の再構築に期待する”と言える。

（2）「外的事項」に属するキーワードの頻度数は222（全体の約４割）を占め、「内的事項」、「学校制度」、「使命・理念」に属するキーワードの頻度数は、順に、141（全体の約４分の１）、138（全体の約４分の１）、98（全体の約５分の１）である。すなわち、教師たちの最大の関心は「諸条件の整備確立」にあると言える。

（3）最も頻度数の多いキーワードから、教師たちの関心は「働き方改革、保護者・地域（社会）、個別指導・少人数指導、少人数学級（学級規模）」に関心があると言える。

（4）教師たちは「コミュニティ・スクール、カリキュラム・マネジメント、アクティブ・ラーニング、チーム学校、GIGAスクール」といった今日的関心事にはほとんど関心を抱いていないと言える。

（５）2014年の調査（小・中学校教師1029人中、自由記述770人）において、キーワード「人間関係（23)、集団（20)、特性（13)、個性（10)」であるのに対して、今回の調査では、(１)、(10)、(６)、(５）であり、今回の自由記述599という数を考慮しても、５年の時間経過の変化が大きい。

次に、教師たちが自由記述で示した意見を12の「クラスター」についてまとめると、次のことが言える。

（１）教育の外的事項の「労働条件・職場環境」では、「多忙さ・ゆとりの無さ」という職場環境の現状と、「業務（改善)」と教職員の「増員」を通して、「多忙さ・ゆとりの無さ」の解消を目指すという「働き方の改革」の推進に教師たちは関心を寄せている。

（２)「保護者・地域（社会)」では、学校は保護者や地域社会の諸問題を抱え込む一方で、諸問題の解決のために保護者や地域社会の協力を必要としている。特に､「学力差の解消」について、大多数の教師が「保護者の関心と支援をお願いする」と答えている。

（３）教育の内的事項の「教育内容」では、教師たちは教育内容が多様になり過多で、ゆとりの無さを感じていると指摘し、内容「精選」の必要性を言う。外国語（英語）への関心は高いが、対応は不透明である。

（４)「教育方法」では、教師たちはゆとりをもった個別指導・少人数指導に期待し、多様な子どもたちの指導に当たりたい、と言う。

（５）外的事項の延長上にあると位置付けた「学校制度」であるが、少人数学級（学級規模）や教科担任・専科教員への教師たちの関心は高い。しかし、小中一貫校やGIGAスクールといった制度改革への関心はほとんどない。

（６）内的事項の延長上に位置付けられた「学校の使命･理念」であるが､教師たちは心の教育･道徳教育、体験、自己肯定（有用）感の育成の重要性を指摘する。